



詩人 井戸川射子さん

いどがわ・いこ／1987年兵庫県出身。2019年詩集『する、されるユートピア』で中原中也賞。2021年小説集『ここはとても速い川』で野間文芸新人賞。2023年『この世の喜びよ』で芥川賞。詩人、小説家として活躍。

子どものころの本とわたし

父が国語教師だったこともあり「休日は家族で図書館に行く」そんな家庭で育ち、子どもの頃から自然と本に触れていました。すごく難しい本を読んでいたわけでも、文学少女なわけでもなかったのですが、幼い頃から活字が好きでした。小学生のときは、『わかったさんのおかしシリーズ』や『青い鳥文庫』などの児童書を読み、中学生、高校生のときは、エンターテインメント小説やマンガを愛読していました。一貫して、ただただ文字を読むことが好きで。大学を卒業して父と同じ国語教師になってからは、まわりの人に比べて読書量が足りないと感じ、そして教職と並行して、詩作をはじめました。

今思い返してみると、子どもの頃の私は、今はすごく好きだったけど、自信を持って「読書家です！」とは言えなかったですね。

もっと楽しくなる！
詩の読みかた

詩は、自由。読み方も、楽しみ方も自由です。小説やマンガに比べて、難しい印象を持たれますが、無理にわかっていなくていいんです。「わからないけど、この文章すごくいい」「難しいけど、この部分がなんか素敵」と感じるのが大切。文章は「わかる、の共感」か「そうなんだ、の発見」か、どちらかを求められることが多いですが、それだけではないのが、詩です。

詩と小説、どちらも創作する中で、よく「詩と小説の違いは？」と聞かれることがあります。自分の中ではつきりと答えが出ているわけではないですが、詩を書く時には無邪気でいたいと思っています。小説は内容が曖昧だったり、理解できないと、ラストまで読むことはできないです。でも詩は、場面設計などなくて曖昧でも、理解されなくても、成り立つ。読む人のことを考えないほうが、むしろ詩になる時もある。

「何かがわかっていく」のが小説であるならば、「わからないものをわからないまま受け止める」それが、詩です。

詩の魅力は、純度の高さ。背景の説明やこの人物が今どこにいるか、何をしているかなど必ずしも必要なく、純粹に自分が書きたいものだけを並べても、詩になります。それが詩の自由さ。ただ自由な分、その自由の中で発揮される、無邪気さが大切だと思います。無邪気さって、誰もが子どもの頃はもって持っている、けど生きていく中ですり減っていくもの。詩を書くこと、読むことで、その気持ちが再び輝くのではないかと、と思います。

祖父が亡くなったときに、悲しい記憶を忘れないように、そのときの気持ちを書いて残そうと思ったのが、詩を書きはじめたきっかけです。最初は、どんなものが詩なのか、文章の最後に丸はつけるのか、改行は必要なのかなど、わからないことだらけでした。なので、とにかく作品をたくさん読んで、そこから詩は自由に書いていい、ということ学びました。

した。自由に書くための創作準備としては、普段から、思いついたことはメモ帳に書き留めています。景色や映画を見て感じたことなども。この一文を詩に使うか、小説に使うかは決まらず、とにかく文字で言葉で、残しています。このメモを書いているときが一番楽しいかもしれない（笑）また、他の作家さんの詩や小説を読んで心に残った一文や題名なども、ノートにメモして、時々読み返しています。

「書いてみよう、書きたい」と思うと、すごく細かに読みたいかなんて、すよね。みなさんにも詩を読んで、書いてほしい。「書くために読む」ことを、ぜひ体験して欲しいです。創作時の状況や環境でも、詩のあり方は変わってきます。第1詩集『する、されるユートピア』は、自分の経験、記憶を忘れないように書きましたが、第2詩集『遠景』は、2人目の子どもを出産して、子育て真っ只中で、すごく辛かった時期に書きました。産休育休のときに、詩で『中原中也賞』を受賞し、その後小説を書きはじめる『野間文芸新人賞』を受

賞。それから教師に復帰して、1年間作家と教師の両立生活が続きました。とにかく時間がなくて大変でした。そんなときでも「今日も少しでも書けた」とかが励みになって、執筆と育児との、気持ちの切り替えになりました。

本を1冊読み終えるのはなかなか難しい。私も最後まで読めなかった本や、今読むものではないかもと感じた小説もありました。それに比べて詩は、短さゆえに、読み始め読み終えやすかったり、何かに落ちこんでいる時でも、その読者の心を逆なでしないという、遠さが優しさにつながったりする。そして、書くハードルも高くない。何を書いてもいいし、今日1日のことを書いていたら詩になることだってある。「これが詩です」と言えば、詩になるんです。この詩の自由さをぜひ味わってみて欲しいです。



Q & A コーナー

質問 詩はどんなときに読むのがいいですか。

井戸川さんの答え 詩の魅力は、いつどんなときでも読めること。本屋で詩集を手に取り「この本には好きな言葉が多い」と思ったら一冊買ってみる。お風呂に入る前や寝る前、隙間時間で詩に触れてみてください。また、自分の思いを言葉にできなかったときや上手く伝えることができなかったとき、すごくへこんだとき、詩を読んで欲しいです。今の自分の状況や気持ちに合わせて、ストーリーに駆動される小説とは違って、詩は共感の余地がなくていい。だからいつでも読むことができるんです。

質問 詩は自分なりの受けとめ方があっていいですか。

井戸川さんの答え 詩の受け止め方は、自由です。自分なりの受け止め方で、無理に理解しようとしなくて大丈夫。国語の試験問題と違って、理解すること、それに対してしっかり答えを出すことが重要ではないです。難しい、と思いながらも「わからないけどいい」「わからないけど好き」に行き着いたら、詩を読むことがとても楽しくなるはず。そこから「自由に表現できるなら、詩を書いてみよう」と思ってもらえたら、嬉しいですね。

書くことにチャレンジする君へ

書くためには「型を学ぶ」ことが大切です。型を知らなければ、型は破れないです。型を学ぶことで、自由に書くことの楽しさを知ることができます。あとはオリジナリティを出すことで、自分が書く意味が生まれる。なかなか難しいです。文章は、一文書いて、また一文書いて、そして何度も読んできた経験が積み重ねとなり、個性となります。だからまずは書いてみる。驚いたことや感動したことなど、ひとつずつにズームをあてて、自分の視点で書いてみる。読者はそれが知りたい。そして、「無邪気さ」を忘れずにしてください。

井戸川射子さんの本の紹介



『無形』
(講談社)
井戸川射子 著



『する、されるユートピア』
(青土社)
井戸川射子 著